

宮沢賢治における1926(大正15)年という結節点

—「オツベルと象」における〈白象〉の告白—

鈴木健司

はじめに

「オツベルと象」は1926(大正15)年1月、雑誌「月曜」に発表された作品である。本稿では「オツベルと象」を、宮沢賢治作品における仏教思想の表出が大きく変化する結節点と位置づけられるのではないかという、提起を行う。

一 先行研究

「オツベルと象」を論じた先行研究は数多くあるが、主要な先行研究として、西田良子(「『オツベルと象』の再検討」「日本児童文学」、1974年)、遠野拓(「宮沢賢治の童話の世界」「日本児童文学別冊」、1976年)、池上雄三(『オツベルと象』『作品論 宮澤賢治』、双文出版社、1975年)、谷川雁(「オツベルと象考」『賢治初期童話考』、潮出版社、1980年)を挙げておきたい。それぞれの論考には、首肯すべき点が多く含まれており、プロレタリア文学や仏教的思想とのかかわりを真摯に追求した好論といえる。本稿自体それらの先行研究と直接的に対立するものではない。

本稿を書く契機となったのは、西田良子の解釈に関する微妙な違和である。西田は「オツベルと象」を「賢治童話の系譜では、非常に特殊な性格をもった作品だ」とし、「それは、大正末期のプロレタリア文学興隆期に書かれた、時代思潮を強く受けた賢治童話と見るべきものであろう」と指摘した。私は西田の指摘を、宮沢賢治作品を当時の時代の流れの中に置いて判断しようとした発言として一定の意義を認めているが、ほんとうに「オツベルと象」は「非常に特殊な性格」といえるのだろうか、そこは疑問だと考えている。おそらく西田は、本来宮沢賢治作品は仏教的な思想が中心を成していると捉えており、その意味において、「オツベルと象」は「非常に特殊な性格」だと述べているのではないか。

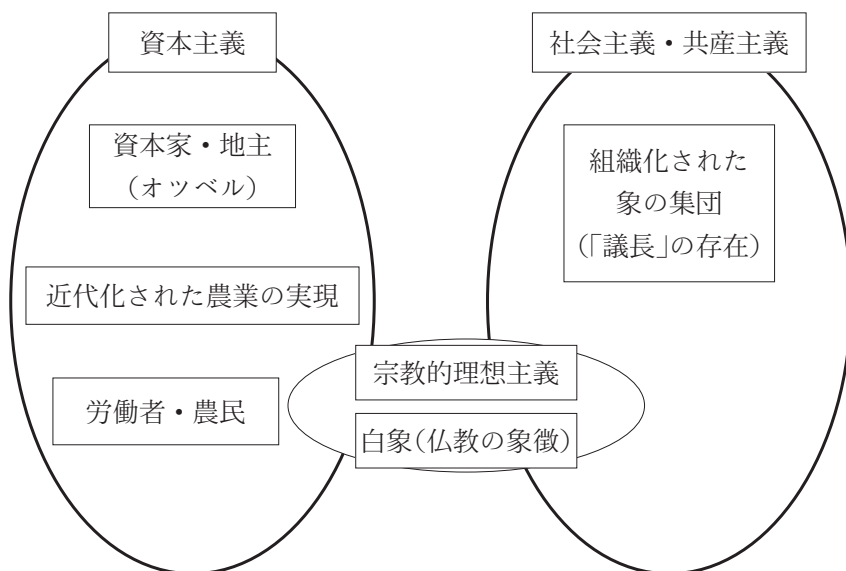
私の西田と異なる点は、「オツベルと象」に見いだされる1926(大

正15) 年前後の言説を、時代の影響として一時的に宮沢賢治のテキストに現れたものとして解釈するのではなく、その時期を結節点として、宗教的表出との連関において、その後多面的に宮沢賢治の思想が展開されていったのではないか、というような仮説を考えている。

二 「オツベルと象」に見られる社会構造

「オツベルと象」というテキストには、資本主義と社会主義・共産主義、そして宗教的理想主義という3つの主義が組み込まれている。

私は、「オツベルと象」に見られる社会構造を、次の図のように分析できると考えている。



簡潔に説明するなら、このテキストには、資本主義的な体制と社会主義・共産主義的な体制が併存しており、その両体制を取り結ぶように宗教的理想主義が存在している。資本主義的な体制は言うまでもなく、資本家としてのオツベルと労働者としての農民が存在している社会である。稲扱器械の六台も据えつけてあることから見れば、そこでは近代的な理想化された農業が実践されており、搾取といったような資本主義の負の側面は白象の登場まで見えてこない。

一方の社会主義・共産主義的な体制であるが、森の中の象の集団が

それに当たると考えている。象は集団で生活している。森の中の沙羅樹の下で碁を打っているということから、見方によれば仏教的出家集団のように見えるが、この集団には〈議長〉が存在しており、後の行動からでもわかるように、資本家オツベルを集団の力で倒すことのできる革命集団としての本質が隠されている。

宗教的理想主義は白象に託されている。白象は森の中の象の集団の一員であることから、社会主義・共産主義的な思想に一定の理解を示しているものと理解できる。とはいえ、その社会制度を全面的に受け入れているかといえそうではなく、その世界になじめない自己というものも自覚しているようだ。通常象といえば灰色であろうが、この象の白色は、灰色の集団の中での異質性を表現している。では「白」とは何か。白象の解釈もこれまでさまざま出されているが、私の解釈は、池上雄三（前出）に近い。「救われないジャータカ」と池上は言う。仏陀失格の白象ということである。「自我の相克に苦しむ近代人のジャータカ」とも池上は言い換えている。まさに、「オツベルと象」は〈救われない〉童話なのである。

三 1926（大正15）年と宗教的理想主義者の告白

「オツベルと象」以前の作品では、宮沢賢治は〈救われる〉童話を書き続けてきたという印象が強いのではないか。

たとえば、「よだかの星」の〈よだか〉は、現世ではともかく、天上の星として転生を果たすテキストであった。「貝の火」の〈ホモイ〉は失明という悪果を得たが、それでも父親が「こんなことはどこにもあるものだ。それをよくわかったお前は、一番さいわいなのだ」と「さいわい」を説くテキストとして閉じられる。「カイロ団長」はどうか。資本主義の底辺にあえぐ労働者・〈アマガエル〉の困窮を描いてはいるが、「王様のあたらしい命令」が都合よく響き渡るテキストであった。また、「度十公園林」の〈度十〉は、まわりから「少し足りない」と見られており、しかも物語途中で死んで消えてしまうのだが、度十の植えた杉林は度十の死後も子どもたちに幸せを与え続けるというテキストと読むことができる。

つまり、宮沢賢治の作品で描かれる主人公たちは、世間の無理解や、社会構造の仕組みの底辺で苦しめられる存在ばかりなのだが、決まって最終的には宗教的理想主義という網によって救い上げられていくのである。そのような意味において、上記の作品はそれぞれ宗教文学の

範疇といえる。

しかし、1926（大正15）年、宮沢賢治はとうとう「オツベルと象」という〈救われぬ〉童話を書いてしまった。それは宗教的理想主義者の敗北の告白でもあった。

「オツベルと象」というテキストは、資本主義的思想か、それとも社会主義・共産主義的思想かといった、二者択一を迫るものではない。テキストの示す理想は〈働くことの楽しさ〉の実現にあったように思う。

白象が「ああ、稼ぐのは愉快だねえ、さっぱりするねえ」と言ったのに対し、オツベルが「どうだい、此処は面白いかい」と聞き、白象は「面白いねえ」と答える。こうして、森からふらっと出てきた白象が、オツベルの農場にとどまることになった。それはそこで〈働くことの楽しさ〉を実感できたからであろう。

しかし、資本主義体制の下では、理想はあっという間に崩れ落ちる。

「苦しいです。サンタマリア。」

「もう、さようなら、サンタマリア。」

これを筆者は、宗教的理想主義者の敗北の告白と捉える。告白とはおのれの社会に対する限界を悟らざるを得なかった者の〈折れた心〉である。白象は仲間の象たちに救出されてはいるが、その方法は、暴力による「革命」または「闘争」という方法においてであった。「『ああ、ありがとう。ほんとにぼくは助かったよ。』白象はさびしくわらってそう云った」という理解しにくい返答は、暴力的革命を容認せざるを得なかった、敗北者としての告白だったと考えられる。

そして、筆者の提起はここから始まる。問題は、それがなぜ1926（大正15）年なのか、ということである。1926（大正15）年周辺のテキストを探ることで、宮沢賢治の置かれていた状況と思想を明らかにしておきたい。

1926（大正15）年は「農民芸術概論綱要」が書かれた年である。「序論」で「おれたちはみな農民である／ずみぶん忙がしく仕事もつらい／もっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい」と記している。「農民芸術概論綱要」は同年8月に設立された「羅須地人協会」での講義用に書かれたとされるが、宮沢賢治は「農民芸術」という夢を掲げることで、理想主義者としての決意を記している。

1927（昭和2）年には、「労農党」への傾斜を示す詩がみられる。詩「一〇一六〔黒つちからたつ〕」だ。「きみたちがみんな労農党になってから／それからほんとおれの仕事ははじまるのだ」と、現実を変える手段として賢治によって選びとられたのが、1926（大正15）年に結成された左派の合法無産政党「労働農民党」（略称「労農党」）であった。宗教的理想主義者である宮沢賢治が、現実的方策として、政治に接近せざるを得なかったところに、「苦しいです。サンタマリア。」という白象の告白が描かれた「オツベルと象」との重なりが見出される。

しかし、「労農党」へのシンプア的活動も、羅須地人協会の活動も、長く続くことはなかった。宮沢賢治自身が花巻警察署長による聴取を受けたことを契機に、1927（昭和2）年3月頃に賢治は「羅須地人協会」の活動を停止させたと推定されている。その理由は「羅須地人協会」に集まる青年たちが左翼活動家として国家権力から見なされるのを避けるためであろう。一方「労農党」は1928（昭和3）年2月の第1回普通選挙の結果、2名の当選者を出したが、同年4月、治安維持法により強制解散させられている。

1928（昭和3）年、賢治は夏の過労によりついに病に倒れ、病臥の人となり、実家での療養を余儀なくされた。

1929（昭和4）年日付不明、「小笠原露宛書簡下書き」に、賢治は次のように記している。「文芸へ手は出しましたがご承知でしょうが時代はプロレタリア文芸に当然遷って行かなければならないとき、私のものはどうもはっきりさういかないのです」。1929（昭和4）年のころは、1928（昭和3）の三、一五事件や、同年6月の治安維持法の改悪により、国家権力からの弾圧も一段と強くなっている時期だが、その時代にあつて文芸として進むべき方向を「プロレタリア文芸」と見ているところに、賢治の己の宗教的理想主義の無力さを認識していたことが窺えるだろう。

「オツベルと象」が発表された1926（大正15）年前後のプロレタリア文学を見ておく。有力な新人が台頭してきた時期である。葉山嘉樹は「淫売婦」（文芸戦線、1925）、「セメント樽の中の手紙」（文芸戦線 1926）を書き、平林たい子は「投げ捨てよ！」（解放、1927）、黒島伝治は「電報」（潮流、1925）を発表している。たとえば葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」は「オツベルと象」における白象の苦しみに通じるものがある。また、黒島伝治の「電報」は、農家に生まれたが故、合格した中学への進学を周囲の悪意により断念せざるを得なく

なるという作品で、裕福な家庭に生まれ当然のように中学に進学していた賢治にとっては、社会の矛盾を強く意識させられるものであったろう。

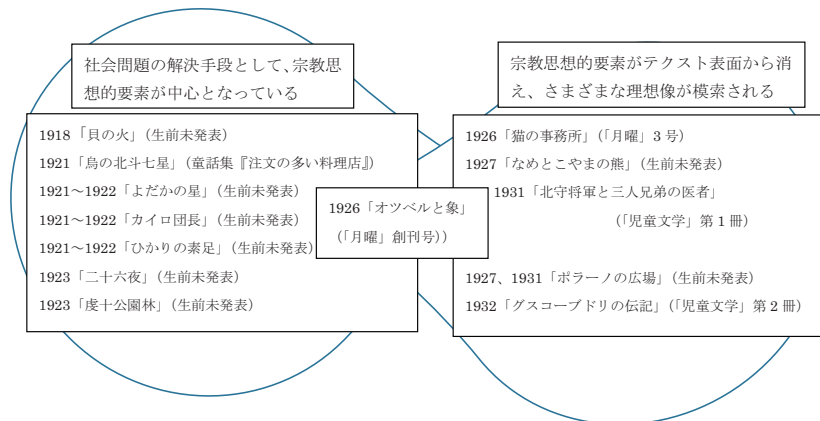
宮沢賢治がどの程度プロレタリア文学を読んでいたか資料的な裏付けはないが、プロレタリア文学作家の指摘する社会体制の矛盾を宮沢賢治もまた同じように受け取っていたと考えてよい。ただ、「私のものはどうもはっきりさういかないのです」という宗教的理想主義者は、社会の変革を訴えるのではなく、「さびしく笑う」という敗北の告白を残したのである。

四 告白の後

宗教的理想主義者が敗北の告白をしてしまった以上、「オツベルと象」というテキストは行き場をなくした、ということになる。つまり、同じ告白は2度と使えないということである。賢治のテキストはこのまま理想を語ることなく終えるのか、それとも、新たな理想をどこかに掲げることができるのか。

「オツベルと象」というテキストを〈結節点〉として見ている筆者の仮説は、宮沢賢治は宗教的理想主義の要素をテキストの底に沈めることを決意し、残された可能性を模索する道を選択したのではないか、ということである。

〈結節点〉としての「オツベルと象」の機能を図で表すと以下のようになる。



例えば、「オツベルと象」と同じ雑誌に発表された「猫の事務所」（「月曜」3号）だが、

獅子が大きなしつかりした声で云ひました。

「お前たちは何をしてゐるか。そんなことで地理も歴史も要つたはなしでない。やめてしまへ。えい。解散を命ずる」
かうして事務所は廃止になりました。
ぼくは半分獅子に同感です。

と締めくくられている。獅子が事務所を解散させてしまうことが本質的な解決になっていないことは、最後に添えられた「ぼくは半分獅子に同感です」という一文からも読み取れるが、「差別・いじめ」という問題の本質的解決を放り投げてしまっているこのテキストは、宗教的理想主義による〈救済〉という方法が残されていたにもかかわらず、宮沢賢治はその方法を採用しなかったことを示している。「オツベルと象」直後の作品である「猫の事務所」がきわめて過渡期的なテキストとならざるを得なかった所以であろう。

未発表作品だが「なめとこ山の熊」の場合はどうか。このテキストには「狐拳」という平等の思想がうまく機能しない現実を直視し、「町に住む旦那」は絶対に負けないという巧妙な資本主義が描かれている。狐拳から旦那を抜いてしまえば、熊と鉄砲だけの勝負となり、常に鉄砲が勝つことになる。熊は負けるだけの存在だ。このような矛盾を解決する方法として、宮沢賢治は、鉄砲を持つ「小十郎」が熊に殴り殺されるという結末を用意した。こうして、社会的な最弱者の熊は〈救われる〉ことになった。では、小十郎はどうか。〈救われた〉のか〈救われなかった〉のか。実はどちらも読めるテキストなのである。それを可能にしたのが、町の旦那を倒す方向でテキストを作らなかった点にあることを強調しておきたい。狐拳から町の旦那を外すことにより、社会主義・共産主義的思想の視点を消し去ってしまったのだ。これを「オツベルと象」からの後退と批判することは可能だろうが、それゆえにこそ〈告白〉という手法を回避することができたともいえる。町の旦那を狐拳から外すこと、それは宮沢賢治にとって苦渋の選択であつたに違いない。

生前未発表で1927年、1931年に大幅な書き加えが確認されている「ポラーノの広場」は、社会問題を取り込んだ晩年の大作で、このテ

クストでは、主人公たちが「産業組合」の設立を目指すといった社会主義的な理想が書き込まれている。しかも、宗教的告白を見出すことはできない。

また、1931年「児童文学」第1冊に発表された「北守将軍と三人兄弟の医者」だが、「北守将軍と三人兄弟の医者」は、作品舞台が古代の中国と推定されるが、戦争という社会問題を扱っており、功績のあったソンパーユ将軍が仙人として祀られることを批判するテキストは、日本の軍国社会への風刺として成り立っているといえるだろう。やはりここにも宗教的問題意識や〈告白〉は見いだせない。

1932年「児童文学」第2冊に発表された「グスコブドリの伝記」では、飢餓や人身売買、強制労働、教育の問題などといった、社会に未解決のまま残されている課題が書き込まれ、現実の悲惨さをよく伝えている。このテキストでは、最終的に科学の力をもって農業改革を目指している点が特徴で、やはり、宗教的問題意識は見られない。

おわりに

これまで、筆者は「オツベルと象」以降の各童話の結末の多様性を、宗教的理想主義者の敗北の告白からの展開として論じてきたのだが、それはあくまで「多様性」であり、「理想形」ではない。宮沢賢治のテキストに「理想形」の描かれることはないと考えている。描けないのである。たとえば、「自己犠牲」という言葉で「理想形」を読み取ろうとする読者や研究者がいるかもしれない。「みんなのさいわい」という「理想形」の場合も同様である。筆者はそのような読みに賛同しない。

宮沢賢治のテキストは収束に向かうのではなく、多様に拡散していく性質のものである。その拡散の模索の中で、ある時宮沢賢治は死を迎えたのだろう。それゆえ、どの作品にも作品の「痛み」のようなものが残されているのである。「なめとこ山の熊」では「熊ども。ゆるせよ」と、小十郎が自らの死を受け入れるところ。「ポラーノの広場」でいえば、作者賢治を思わせるレオノキューストが、一人「産業組合」から離れ、遠く（トキーオ市）から見守るというところ。「グスコブドリの伝記」でいえば、主人公・グスコブドリだけが志願兵のように一人死にゆくところ。これはヒロイズムのようなものでなく、自分は幸せになってはいけないという、いわば、テキストが「理想形」に向かおうとすることへの戒めである。

- * 1926（大正15）年以降に作られ、宮沢賢治の代表作と目される「セロ弾きのゴーシュ」（生前未発表）や「風の又三郎」（生前未発表）、「銀河鉄道の夜」（第四次稿・生前未発表）は、テキストに社会問題や社会改革の問題が含まれていないので、上記の考察から外している。ご了解願いたい。
- * 本稿は2017年10月14日、文教大学 文学部開設30周年記念 2017年度「日中韓三国日本語文化に関する国際シンポジウム」において、招待講演として口頭発表した内容が元となっている。

（本学教授）

歌舞伎鑑賞教室

六月に国立劇場で行われた歌舞伎鑑賞教室に参加しました。鑑賞教室は、最初に役者の方が歌舞伎の舞台の仕掛け、演目の中で登場する演出、今回上演される演目などを解説してくださり、そのあとで実際に演目を鑑賞するという流れになっていました。

今回の演目は「毛抜」というものでした。その内容は、小野小町の子孫である小野春道の館では、朝廷に献上する家宝の短冊が紛失した上、娘の錦の前は髪が逆立つという奇病にかかり、婚礼が延期となっていました。そこに、錦の前の婚約者の文屋豊秀の家来である糸寺弾正が訪れます。糸寺弾正は小野家の家老の八剣玄蕃に、奇病を理由に婚約の破棄を告げられます。弾正は実際に錦の前の毛が逆立つという病状を目にして驚きますが、薄衣を被せると髪が逆立たないと聞き、不思議に思います。春道との面会を待つ間、弾正が毛抜で髻を抜いていると、傍に置いていた毛抜が自然と立ち上がります。それを見て訝しんだ弾正は、錦の前の髪が逆立つ奇病の謎を毛抜を手がかりに解決し、小野家に訪れ無理難題を突きつける不審な男・万兵衛の懐から家宝の短冊を見つけ出します。

中でも、観客の目を引きつける歌舞伎独特の表現で、事件の謎を解ききっかけになる毛抜が重要な場面では巨大になる演出は印象的でした。一方で、弾正が錦の前の立てたお茶を運んできた美しい腰元の巻絹を口説いて振られるなど、愛敬のある一面も見られました。役者の方が当日上演される演目の内容まで解説してくださり、初めて歌舞伎を見る人でも楽しめるようになっていきます。歌舞伎は難しそうだと思っている人や、興味はあるけど実際に見たことはない人などさまざまな人に参加してみたいと思います。

(日文二年 太田 絢恵)